

News Letter No. 68

23年3月18日(金) 発信

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト (加藤早稲子) e-mail: sato@chikyu.ac.jp

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



私たちの研究の舞台となった小河墓遺跡 (撮影 佐藤洋一郎)

佐藤プロジェクト終了にあたって

佐藤洋一郎 (総合地球環境学研究所 副所長・教授)

佐藤プロジェクト終了にあたって

佐藤洋一郎（総合地球環境学研究所 副所長・教授）

プロジェクトの五年も終わります。終わってみればあっという間の5年でした。何ができたか、何がわかったかと言われるとじくじたるものもありますが、幸い評価委員会の評価も高く、プロジェクトにご参加いただいた皆様のご恩には多少はむくいることができたかと思っています。みなさまには心よりお礼申し上げます。

プロジェクトの研究が進むにつれ、農業生産が決して持続的に伸びてきたわけではないことがわかってきました。「崩壊」がしょっちゅう起きていたのです。私たちが明らかにした「崩壊」の事象で、やはり大きな関心呼んだのが中国新疆ウイグル自治区での小河墓遺跡の調査でした。そこには、数千年も前から社会と人びとの暮らしがあったのです。そしてそれがあるとき、失われてしまった。その原因は複雑で、「気候変動」というように一言でかたづくものではありません。そのプロセスを明らかにすることが今後の課題ではないかと思えます。

崩壊は日本も例外ではありませんでした。おりしも東日本大震災が列島を襲い、中には町ごとすべてがうしなわれてしまったところもあると聞きます。この町に住んでいた方々は、町や地域の持続的発展はおろか、持続的な生活そのものを奪われたのです。原因がなんであれ、人びとの生活が奪われ、社会と生産が崩壊したことにかわりはありません。

日本ではここ3分の2世紀の間、こうした崩壊の現象は幸いにも起きませんでした。伊勢湾台風や阪神淡路大震災のような大災害はありましたが、影響が全土に及ぶ災害、多くの国民が将来の持続的発展を疑うような、崩壊という語があてはまるほどの事象は、原発事故ともあいまって戦後初とあってよいでしょう。つまり戦後の3分の2世紀は日本の歴史のなかでも奇跡の時代でした。そのことはこの時代を生きた私たちにはまったくの幸いでしたが、これからの時代はもはや奇跡の時代ではないと思えます。これからの時代をどう生きるか、「持続可能性」などというもはや幻想とも思える概念に代わる新たな概念や、それに基づく生き方の模索が必要になってきていると言えます。

地球研は、これに対して未来可能性という語を使っています。所与の条件のなかでどのような技術が必要か、社会はどういう仕組みを構築しなければならないか、個々人はどう生きるべきか、そもそも生きるとはどういうことか、といったところにまで踏み込んだ議論が必要だろうという判断から来る概念です。むろん地球研の仕事は研究にあります。こうした新たな研究を、プロジェクトとして立ち上げようというわけです。私としては、プロジェクトメンバーであった皆様の中から、こうした視点での新たなプロジェクトの提案が出てくることを期待したいと思っています。大事なことは、崩壊に直面した社会がその後どのようにして回復を果たしたか、を研究することかもしれません。それでこそ、未来に向けた発信、未来可能性の探求なのではないかと思えます。

最後になりましたが、皆様のますますのご発展を祈念して、終わりにします。ありがとうございました。